

礼拝の心

おはようございます。皆さん、寒い季節を楽しんでいますか。私はそうでもありません。「賛美歌」と題したシリーズも3週目となりました。1週目は、神の偉大さについて学び、先週はイエスという岩の上にとしっかりと土台を築くことについて学びました。このシリーズでは、古い賛美歌からインスピレーションを得てメッセージを語ってきましたが、今週は趣向を少し変え、現代の賛美を取り上げたいと思います。

今週のメッセージは、マット・レッドマン作の「ハート・オブ・ワーシップ」（賛美の心）からインスピレーションを得ました。マット・レッドマンは、多くの楽曲を世に送り出す現代のソングライターです。彼の書いた歌は、世界中の教会で歌われています。レッドマンは、イギリスにある教会の賛美部門の牧師です。1990年代後半、レッドマンの牧師だったマイク・ピラバチ師が教会で大きな改革を起こしました。マイク牧師は、礼拝中の賛美の部分がただの繰り返しになってしまっていて、会衆が本来あるべき姿勢で賛美していないと感じました。賛美のひとつときに活気を与えようと思ったマイク牧師は、音響システムや機材をすべて撤去することに決めました。マット・レッドマンはこの決断を次のように振り返ります。「牧師は、音響システムをなくしてしばらくは使わないと決めた。僕たちが合わせられるのは、ただ声だけだった。牧師が言いたかったのは、僕たちが賛美を見失ってしまったということ。その真髄へと立ち返るには、すべてそぎ落とさなければならなかった。」マイク牧師は会衆にこう問いかけました。「日曜日にここに来るとき、皆さんは神に何をささげようと思っていますか。」マット・レッドマンが「ハート・オブ・ワーシップ」を作ったのは、まさに楽器を使えなかったこのときでした。この楽曲は、教会で広く歌われることを意識して作られたものではありません。レッドマンはある日、当時の教会の改革が自分自身に変化をもたらしたということについて自宅の寝室で考えていました。こういった思いの中から、この歌が生まれたのです。

礼拝は、クリスチャンだけがする行為ではありません。世界中の人々はあらゆるものを礼拝します。これは私たちの性（さが）です。アメリカではこの季節、多くの人が日曜日にフットボールのスタジアムを参拝します。スタジアムには多くの人々が詰めかけ、数時間にわたる試合中、大声で声援を送ります。選手の名前も成績もしっかり頭に入っています。自分の応援するチームの勝敗に一喜一憂します。フットボールのファンであることに問題はありますが、チームの応援に多大な時間とエネルギーを費やすなら、それはフットボール崇拝と言えるでしょう。ビートルズが人気を博した時代を覚えておられる年齢の方もここにはいらっしやるでしょう。ビートルズ来日時には、その姿を一目見ようと大勢が集まり、黄色い声をあげました。ビートルズ崇拝とも言える現象でした。スピリチュアルなものに関しても、人々はあらゆる神を崇拝します。今日私がお話するのは、唯一真の神を礼拝することについてです。

今日は礼拝の心についてお話しましょう。礼拝について語るのはなぜ大切なのでしょう。礼拝は、聖書の中心トピックです。礼拝、拝む、拝するといった単語は、新改訳聖書では200回以上登場します。その中からいくつか挙げて読んでみましょう。

歴代誌第一 16:29 は、ダビデが書いた詩です。「そのみ名にふさわしい栄光を主に帰せよ。供え物を携えて主のみ前にきたれ。聖なる装いをして主を拝め。」（口語訳）この個所で、神が聖なるお方だから私たちは神を礼拝する必要があるとダビデは語ります。

詩篇 22 : 27 にはこうあります。「地の果て果てもみな、思い起こし、【主】に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましょう。」私たちはいろんな国の人たちの集まりですから、これは私たちにぴったりのみことばです。私たちはあらゆる国々の民ですが、この個所は、それらの国々の民が神の御前で礼拝すると語ります。

詩篇 95 : 6 「来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、【主】の御前に、ひざまずこう。」この詩篇の著者は、私たちが主の御前にひれ伏し、ひざまずくべきだと語ります。

新約聖書では、ローマ 12 : 1 にこうあります。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」この個所で、私たちは体を供え物としてささげるべきである、それが礼拝のひとつのかたちだとパウロは語ります。

今日注目したい聖書個所は、ヨハネ 4 : 20-24 です。これは、イエスがサマリヤ人の女と井戸端で話しておられる場面です。この話をご存じの方も多いでしょう。イエスはこの女性と井戸のそばで出会われました。水をくれるようにイエスが女性に頼み、そこから話はイエスが差し出される生ける水へと発展します。その中で、ふたりは礼拝について話し始めます。これが 20-24 節にあることばです。「4:20 私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」4:21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。4:22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。4:24 神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

聖書には、礼拝について多くが記されています。しかし、私たちの多くは礼拝を誤解しているようです。数年前、ジョージ・バルナが北米である調査をしました。ジョージ・バルナはアメリカであらゆる調査や研究をする人物です。今日ご紹介する調査は、北米のクリスチャンが礼拝をどのように捉えているかについてです。質問は 4 つです。第一問…北米のクリスチャンのうち、神のご臨在を感じたことがないと答えたのは何パーセントでしょう。32%の回答者が神の臨在を感じたことがないと答えました。第二問…同じ回答者の中でどれくらいの人が、この一年間、神のご臨在を感じなかったと答えたでしょう。クリスチャンである回答者の 48%がこの一年間で神の臨在を感じなかったと答えました。第三問…礼拝の意味を説明してくださいという問いに対し、どれくらいの人がわからないと答えたか、または教会に行くこととか神を信じることなどのいいかげんな答えをしたでしょう。67%のクリスチャンが礼拝の意味を答えられない、または教会に行くことなどと答えました。第四問…教会に通う成人のうち、どれくらいの人が、礼拝を生活の最優先事項と考えているでしょうか。礼拝を生活の最優先事項と考える人は、回答者の半数以下でした。

この調査結果を読んで、私はショックを受けました。それ以上に悲しい気持ちになりました。教会に通ってクリスチャンだと名乗る多くの人が、本当の礼拝が何であるかをわかっていないのです。礼拝の意味さえ答えられないというのです。教会の指導者のひとりとして、私はなぜだろうと思いました。教会に行っているのになぜ礼拝がわからないのだろうと思いました。この

調査結果が示すように、クリスチャンの間で礼拝について誤解や混乱があるようです。今日ここで皆さんに礼拝の意味を聞いたら、皆さんは答えられますか。

今日の残りの時間を使って、礼拝についての誤った考えと正しい考えを見ていきましょう。これは私が考え出したものではありません。私が神学校の礼拝神学のクラスで学んだことと、そのクラスの課題で読んだ説教から得たものです。今日のメッセージを聞いて、皆さんが礼拝について正しく捉え、礼拝の心をよりよく理解していただければと願います。

1: 礼拝は何を知っているかではない。歌や礼拝の進行行程を知っているからと言って、礼拝していることにはなりません。例えば、私は相撲についていろいろ知っています。相撲についての記事を読んだこともありますし、相撲のサイトでいろんな力士や稽古のしかた、技についても読むことがあります。実際に **3** つの場所に行ったことがあります。テレビでもよく見ますし、私が相撲が好きだと知っている英会話の生徒は、毎年、相撲カレンダーをくれます。それほど相撲についてよく知っていても、土俵に上がって白鵬と対戦できるわけではありません。教会で賛美する曲を全部覚えて知っていても、礼拝していることにはなりません。

礼拝は何を知っているかではなく、誰を知っているかである。私たちは神を知っています。私たちクリスチャンには、神との一対一のつながりがあります。神がなしてくださったあらゆる御業を知っています。聖書を読んで、これから神がなそうとされることを知ることができます。だから私たちは神を礼拝するのです。神を知っているというそのことだけで、私たちは礼拝へと突き動かされます。詩篇 **86:8-10** にはこうあります。「**86:8** 主よ。神々のうちで、あなたに並ぶ者はなく、あなたのみわざに比ぶべきものはありません。 **86:9** 主よ。あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て、伏し拝み、あなたの御名をあがめましょう。 **86:10** まことに、あなたはたいなる方、奇しいわざを行われる方です。あなただけが神です。」主だけが神であり、私たちの礼拝にふさわしいお方です。ジョン・マッカーサーは言います。「礼拝は、神なるお方に対して、私たちがふさわしい形で応答する姿である。」礼拝は、神を知ることがすべてです。

2: 礼拝は、私たちのアイデアではない。礼拝という概念は人が作りだしたものではありません。原始人があるとき集まって話し合い、礼拝を考え出したものではありません。原始人がこれを発明して、「すばらしい発明だから、みんなで集まって礼拝しよう」と言ったものではありません。礼拝は人類が考え出した習慣ではないことを覚えていてください。

礼拝は、私たちのアイデアではなく、神のアイデアである。神がモーセに与えた律法の第一番目は、主なる神以外に他に神があってはならないというものでした。つまり、神が唯一私たちの礼拝の対象というわけです。また、私たちが神を礼拝することを神ご自身が命じておられることも意味します。礼拝は、神とのつながりから何を得られるかだけでなく、神に何をささげるかも大切です。礼拝は私たちのささげものです。私たちが神を礼拝すると、神は喜んでくださいます。礼拝したいという願いを持つように私たちが創造されたのは、そのためです。

3: 礼拝は、見物するものではない。残念ながら、礼拝は、教会に来てただ座り、他の人のパフォーマンスを見ることだと思っている人がたくさんいます。周囲を見渡して他の人が礼拝する姿を真似したり、批判したりする場ではありません。また、真の礼拝はパフォーマンスやショーではありません。楽器や音楽、歌が中心でもありません。神のすばらしさやあわれみ深さを語る人の言葉をただ聞くだけでもありません。礼拝は、見物するものではないのです。

礼拝は、参加するものである。観客は私たちではなく神です。私たちの礼拝は、たったひとりの観客である神のためになされます。周囲の人が何を考えどう思っているかを気にする必要はありません。私たちが考えるべきなのは、礼拝すべきお方のことです。神を礼拝するときは、積極的に参加しなければなりません。詩篇には、礼拝を示す動作がたくさん書かれています。詩篇に登場する動詞をここに挙げてみましょう。神に叫ぶ。神の御前に踊る。手を叩く。ひれ伏す。手を上げる。主のもとに走る。御顔を求める。これらはすべて動作や行為をあらわします。じっとしたまま神のもとに走っていくことはできません。私たちは積極的に神を礼拝する必要があります。参加するのです。ルイ・ジリオは言います。「礼拝は私たちがすることだ。見るものではない。」皆さんはどうでしょう。礼拝を見物していますか。それとも積極的に参加していますか。

4：礼拝は体の動作だけではない。私たちはともすれば、形だけの礼拝をしてしまいます。賛美の歌詞で手を上げると言うから手を上げてしまうことがあります。歌詞が立つと言うから、賛美リーダーが立つように促すから、みんな立っているからといった理由で立つこともあります。メッセージでいい言葉を聞くと「アーメン」と言いますが、心がこもっていないこともあるかもしれません。どんなことをしても心ここにあらずなら、それはただの形式だけです。礼拝は体の動作だけではありません。

礼拝は、霊的なものである。私たちの霊と心です。体だけが礼拝するものではありません。私たちの体もちろん礼拝に関わります。先ほど、礼拝は積極的に体を使って参加するものだと言いました。しかし、真の礼拝は心から始まります。私たちの霊から始まり、そこからあふれ出て、生活全体に浸透します。私たちの体にも浸透しますが、礼拝は心から始まります。真の礼拝とは、私たちの霊と神の霊がつながることです。イエスがサマリヤの女と話されたとき、神は霊なるお方だから、私たちも霊とまことによって神を礼拝しなければならないとおっしゃいました。心からの礼拝でないなら、それは見せかけだけです。心からとはどういう意味でしょう。もちろん心臓という意味ではありません。霊的な心という意味です。イエスの血潮によって洗われた清い心、恨みを募らせない心です。私たちは赦しを求めるべきことがないか自らを省みる必要があります。そうすれば、必ず何かあります。私たちはこうして赦されて、霊的な礼拝によって応答するのです。

5：礼拝（賛美）は歌うことにとどまらない。石を投げる前に説明を聞いてください。賛美というと、歌うことや教会で歌う時間を指すと思いがちです。教会の指導者たちも、賛美チームや賛美リードなどといった用語を使うことで、その傾向に加担してしまったと言えるでしょう。これにより、賛美チームの人たちがステージに上がっているときに賛美している時だというイメージが定着してしまいます。私たち家族は、賛美リーダーの呼び方を変えた教会に行ったことがあります。その教会の賛美リーダーは、賛美リーダーと呼ばれるのが嫌でした。それで、自分のことをリード賛美者と呼ぶようになりました。彼自身が賛美する人たちの一員であることを強調しようとしたのです。礼拝・賛美はもちろん歌うことですが、それにとどまりません。賛美チームや賛美バンドがあるのはけっこうなことです。質の良い賛美チームや質の良い賛美はすばらしいものです。私は歌うのも好きですし、賛美音楽を聞くのも好きですが、それが礼拝・賛美のすべてではありません。礼拝・賛美は歌うことにとどまりません。

礼拝は生き方である。ルイ・ジリオは言います。「礼拝は私たち一人一人の、そして教会としての神への応答である。神のご性質、御業への応答である。私たちの言動と生き方によって表現するものである。」先に読んだローマ 12：1 を思い出してください。そこには、霊的な礼拝として人生をささげなさいとありました。私たちの行いすべてが神への礼拝であるべきです。こ

のことを念頭に、教会のことを考えてみましょう。歌うことは神を礼拝する行いです。メッセージを語ることも、神を礼拝する行いです。献金も神を礼拝する行いです。皆さん、十分の一のささげ物や献金をささげることで神を礼拝しているのご存知でしたか。だからこそ、聖書は喜んでささげなさいと語るのです。今日は聖餐式に与りましたが、聖餐式も神を礼拝する行いです。皆さんが朝来るときに挨拶して迎え入れてくれる受付係の人たちも、神を礼拝する行いをしています。日曜学校を教えることも神を礼拝する行いです。教会の中でなされることは正しい心であるなら何でも、神を礼拝する行いとなります。正しい心でしていないなら、それは形だけであり、礼拝ではありません。

6：礼拝する場所は教会に限られていない。教会で礼拝することができますし、そうすべきです。しかし、礼拝する場所は教会に限られてはいません。今日の聖書個所に登場するサマリヤの女は、神を礼拝するためには聖なる山に行かなければならないと思っていました。現代の人々は、教会の会堂が聖なる場所で、礼拝するためにはそこに行かなければならないと思っています。会堂という建物が教会であると誤解しているのです。教会は建物ではなく人です。礼拝するのに特別な場所に行く必要はありません。礼拝する場所は教会に限られていません。

礼拝はどこでもできる。今日の聖書個所の女性が山に行かなければならないと思い込んでいたように、現代のクリスチャンは礼拝するには教会に行かなければならないと思っています。しかし、礼拝はあらゆる場所でささげるべきです。コリント第一 10:31 「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」神の栄光を現すためにとあります。それは礼拝です。教会以外の場所で、どのようにして神を礼拝できるでしょう。家庭なら、家族をいたわることで神を礼拝できます。思いやり、優しく話しかけ、手伝ったり何か家族のためにしてあげたりしてはどうでしょう。意識的に自分のことよりも人のことを優先させるなら、それは神を礼拝していることとなります。地域社会に貢献することで神を礼拝できます。日本では、近所の公園清掃が町内会の持ち回りで行われます。こういった掃除に参加し、クリスチャンであるあなたが地域のことを気にかけていると示すことができます。恵まれない家庭を手助けすることもできます。あなたが神様から金銭面での祝福をいただいている、近所に困っている人がいると知っていたとしましょう。その祝福を分かち合うなら、それも神を礼拝する行いです。またすばらしい証にもなります。私たちの近所には、倉庫に住んでいる男性がいます。数ヶ月前、私の妻は焼き菓子類をたくさん作ったので、それをその男性に少しおすそ分けすることにしました。その男性はいつも愛想よくしてくださっていて、お孫さんが娘と同じ学校に通っているからです。焼き菓子のおすそ分けをして以来、以前よりもっと親しくなることができました。わざわざ家まで来て、近所のイベントに誘ってくれたり、倉庫の屋上で育てた果物を持ってきてくれたりもしました。神は、私たちがこの男性と親しくなれるよう扉を開いてくださっています。それは、この男性が神の愛を感じるためです。職場でも神を礼拝できます。上司から追加の仕事を頼まれても、文句を言わないようにしましょう。職があることを感謝しましょう。神への礼拝として、また同僚への証として、仕事をしましょう。同僚たちに親切にしましょう。

7：礼拝は、いいかげんにはできない。見かけ倒しの礼拝はできません。うわの空で礼拝はできません。うわの空の礼拝は礼拝ではありません。神は中途半端な心や努力を望まれません。私たちのすべてを望まれます。礼拝はいいかげんにはできません。

礼拝は心がこもっている。心からの礼拝でなければ、本物の礼拝ではない。今ここに小さい子どもさんがいたら子どもさんの耳をふさいだほうがいいかもしれません。皆さんが子どもの

とき、サンタクロースがプレゼントを持ってやってくるのを楽しみにしていたのではありませんか。サンタ宛てに手紙を書き、ブロックがほしいとかお人形がほしいとか願ったでしょうか。サンタとトナカイの絵を描いたりしましたか。アメリカで育った人なら、ショッピングモールでサンタの膝に座って、クリスマスプレゼントに何がほしいかお願いしたことでしょう。サンタといっしょに写真を撮って、サンタに「いい子だったからきっと欲しいプレゼントがもらえるよ」と言ってもらうのです。子どものころは、ほしいプレゼントをもらうためによい子にしていようと一生懸命頑張りました。けれども大きくなって、サンタクロースがいないことを知りました。がっかりです。それまで長いことサンタがいると信じていたのに、うそだったのですから。本当にがっかりです。私たちが中途半端な礼拝をささげると、神もそんなふうにがっかりなさいます。心のこもった礼拝とは、私たちの心と同時に態度にも関わります。礼拝する姿勢というものが重要です。日曜だけでなく、毎朝目が覚めたら常に神を礼拝できる方法を探すという姿勢です。

最後に、礼拝は神の主権に対する私たちの応答です。神の偉大さにひれ伏すことから、倒れた隣人に手を貸すことまですべてを含みます。礼拝は受け身ではありません。日曜に教会に来て、「アーメン。ハレルヤ！」と言うことでもありません。神の御名が崇められるためにすべてをなすことです。本物の礼拝は、生ける神との本当の出会いの結果生まれます。神を礼拝することは、神が尊いお方であると宣言することです。神が尊いお方であると宣言するには、まずその尊さを知らなければなりません。ここでお尋ねします。神はあなたにとってどれほど尊いお方でしょうか。祈りましょう。